

中学3年生が「高志学」5月研修を行いました

令和7年5月15日（木）に中学3年生が福井駅前で「高志学」5月研修を行いました。この研修では「どのように仮説を立てるか」、「仮説を検証するとはどういうことか」を学び、現在執筆している論文をよりよいものにすることが目的です。駅前のにぎわいを創出している、まちづくり福井株式会社に終日ご協力いただき、主体的に学ぶ生徒の姿が印象的な研修となりました。



午前中は、まちづくり福井の松尾大輔社長の「まちづくりと地域活性化の実際と課題」と題する講義を受けました。福井の中心市街地の活性化を推進させるために県外からの旅行客を呼び込んだり、インバウンドに期待したりするような誰もが考える競争が激しい手法は避け、そのまちに暮らす人や働く人がにぎわいを感じ、楽しめる工夫をしていくことの重要性が語られました。一過性の施設や場所を提供することは容易だが、50年先も持続できるものを生み出せるかどうかの視点が、新しいものを創り出すときには必要であることを教えていただきました。人口減少時代に量より質と密度を高めてオリジナリティを生み出すまちづくりの手法は、これまで我々の考えになかったものが多く、生徒だけでなく教員にとっても貴重な経験となりました。



午後からは、グループごとに福井駅前に移動して事前に自分たちで立てた仮説の検証を行いました。まちづくり福井株式会社は、「日常の中から福井の活力を創造する」ことをキーワードに福井駅前にいろいろな施設を創っています。グリフィス記念館、ふくみち、ヨリバ、コノジナガヤ、ULO、ハピリンの6カ所を訪れて実際にインタビューすることで、「福井に住む人が楽しめる、福井でしか楽しめない」場所になっているのかどうかの検証をしていきました。

「ふくみちでキッチンカーの集客が見込めると判断したのはなぜですか?」、「ULOは初めての人が入りにくい雰囲気があると思いますが、何か対策はありますか?」、「ヨリバはマナーや安全面で不安があると思いますが、どのように考えていますか?」といった問いが生徒から次々と出てきました。説明担当の方が「鋭い質問ですね。」「そこまで考えてくれているとは思いませんでした。」とおっしゃるほど、生徒の思考が深まっていることが分かるフィールドワークとなりました。この経験を生かして、今後は自分の問いの仮説を検証するために一人ひとりがフィールドワーク先を決め、個別に仮説の検証を進めていきます。